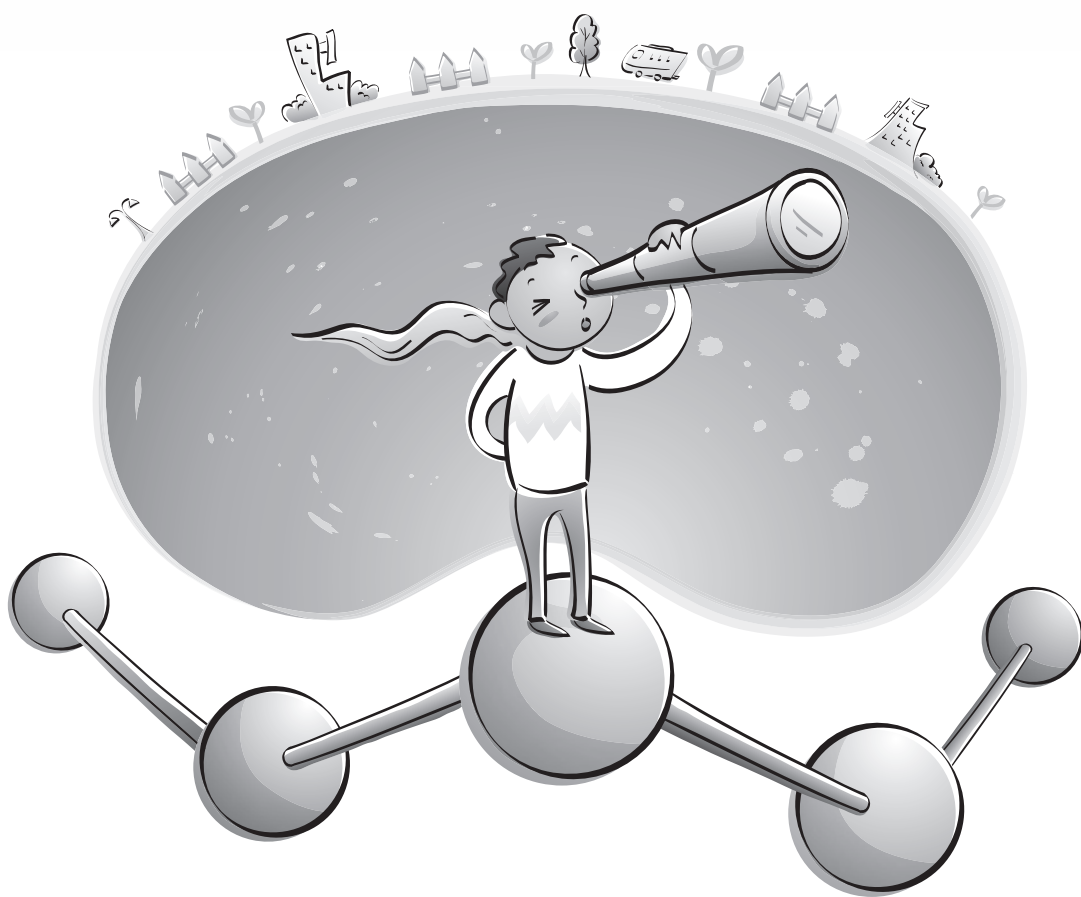


さいせい
「こころの再生」府民運動

小学校5・6年

「大切なところ」を見つめ直して



大阪府教育委員会

「^{さい せい}こころの再生」府民運動とは

昔も今も、これからも、大切にしなければならない5つのこころ

生命を大切に^{する}

思いや^る

^{かんしゃ}感謝^{する}

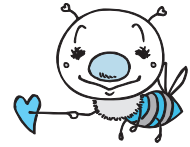
努力^{する}

ルールやマナーを^{守る}

を今一度見つめ直し、

あいさつを^{する}

など一人ひとりが身近な取り組みを行うことを呼びかける運動です。

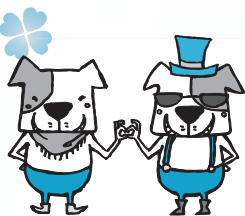


子どもたちへ（^{おおさか}大阪「こころの再生」^{せんげん}宣言より）

君たち一人ひとりが、多くの生命のなか、「ただひとり」の「生かされている」存在であることに気づいてほしいのです。そして、今一度、生命の大切さ、人としての^{そんげん}尊厳の大切さを^{かくにん}確認しましょう。

よりよく生きるため、自分が一番大切にしたいこと。「一生懸命努力する」「思いやりの心を持つ」「自分に^{せきにん}責任を持つ」「感謝の気持ちを忘れない」。ひとつでもいいのです。「こころ」のよりどころを確かなものとするため、自分の『「こころ」のルール』を持ちましょう。決めるのは、君たち自身です。

自分の^{ゆめ}夢や希望、目標に向かって、全力で取り組みましょう。「自分の本気」が、自分の未来を拓くのです。大人は、君たちを^{おうえん}応援します。やってみなはれ。



この資料は、^{しりょう}「こころの再生」府民運動の『5つのこころ』や『あいさつを大切に^{する}』ことをテーマに、みなさんが自分の「こころ」を見つめ直し、身近なことから始めてみるきっかけになるようにと願い作成しました。みなさんの「こころ」に^{とど}届くことを期待しています。



目次

次

「こころの再生」府民運動とは 2

あの人からのメッセージ 赤星 憲広さん 4

あの人からのメッセージ よぬこ 濱口 優さん 5

生命を大切にす

● メジロ 6

ワークシート メジロ 11

思いやる

● 背中 12

ワークシート 背中 15

感謝する

● 言い忘れた言葉 16

ワークシート 言い忘れた言葉 21

努力する

● 道頓堀を作った人 22

ワークシート 道頓堀を作った人 27

ルールやマナーを守る

● ひとかけらのうそ 28

ワークシート ひとかけらのうそ 33

「あいさつ」をもっと大切にしよう

● ニリンソウ 34

ワークシート ニリンソウ 37

「English」+「あいさつをすべ」 38



みなさん、「こんにちはー」元阪神タイガースの赤星です。僕たちが生活する社会は多くの人と人が支えあって生きています。その人と人をつなぐ第一歩があいさつです。「おはよう」「こんにちは」「ありがとう」。そう言われて、嫌な気持ちになる人はいませぬよね。大きな声であいさつするのが苦手な人も自分が言われてうれしいと思ったら勇気を出してあいさつしてみましよう。

僕がオーナーを務めるチームの入団を決めるときは、キャッチボールと元氣を見ます。相手の取りやすい胸もどめがけて投げる選手、相手がそれた球を投げたとき「さっー」と動いて正面でキャッチのできる選手、こうした相手のことを考えることのできる選手を大事にしています。「相手を思いやる」

という少しむずかしいかもしれませんが、まずは、自分の友だちや仲間がどんなふうに考えているのか、自分には何ができるのか、そういうところから気付けていけばいいのではないのでしょうか。

みなさんは、「なんで、ルールや決まりを守らなアカンねん」「少しぐらい破ってもええやん」と思ったことはないですか？ でも皆さんが成長し、社会人になると、一分、二分の遅刻や少しのルール違反が多くの人に迷惑をかけたなり、大きな事故につながったりすることにになります。みんながルールやマナーを守ればもっと気持ちのいい社会になると思います。みなさんが小さなことから、できることから行動を起こしてくれることを願っています。

赤星 憲広 (あかほし のりひろ)

●1976年4月10日生まれ。1993-94年甲子園選抜大会出場、2001年阪神タイガース入団。新人王、盗塁王、ゴールデングラブ賞などを獲得、2009年12月引退。2003年～引退までは盗塁した数の車椅子を病院や施設に寄贈。2005年少年野球チーム「NPO法人レッドスターベースボールクラブ」設立。引退後も「Ring of Red～赤星憲広の輪を広げる基金～」を設立し、車椅子寄贈を継続。2012年からは「Ring of Red交野市チャリティーマラソン」の実行委員長を務める。



みなさん、よるこの濱口です。僕が人生の中で、どの時代に戻りたいかと聞かれたら、迷わず「小学生に戻りたい」って言いますね。毎日、友だちと何して遊ぶかということばかり考えてたから。残念ながら、勉強は苦手やった。「みんな、勉強せえへんかったら俺

みたいになるぞ(笑)」。僕は、もともと体動かすのは苦手なんやけど、海に潜ったり、ドーバー海峡泳いだり、最初はしんどかったけど、やってるうちにだんだん楽しくなってくる。苦手なことも、やればできると実感してる。そういう意味で、努力するというのは大事やね。

僕は、「生命」について、あんまり考えたことはないんやけど、確かAC(旧公共広告機構)のCMやったかな。少女が屋上で、「シンデレラ」や「みにくいアヒルの子」などの童話を読んでるんやけど、最後まで話を読まないで自

殺しようとする、それをシンデレラやアヒルの子たちが出てきて「最後まで話を読んで」と自殺を止める内容。人生って本当に悪いことばかりやないんよ。今、本当に辛くて、しんどくても、いつか必ず笑って話せる日が来るよ。それを忘れないでほしい。

僕は、相手の有野君もそうやけど、面と向かって「ありがとう」っていうの苦手やねん。言わなくても、相手は分かってくれるやろうと思ってた。でも、東京に出てきて、いろんな人にお世話になると、自然と「ありがとう」と言うようになった。それで、実家に帰った時に、おかんにも、この飯うまいなと言うたら、おかんが涙ぐんでた。気持ちでわかってくれると思ってても、やっぱり、言葉にせなあかんなど改めて思ったわ。みんなも、恥ずかしがらず、言葉にしような。

よるこ 濱口 優 (はまぐち まさる)

●1972年1月29日生まれ。1990年松竹芸能にて活動開始。1992年第13回「ABCお笑い新人グランプリ」審査員特別賞受賞。第27回「上方漫才大賞」新人奨励賞受賞。1999年ドーバー海峡を水泳で横断。2003年海にもぐってモリで魚を獲った際の「獲ったぞ~!!」というセリフが大流行。現在もバラエティをはじめ多数のレギュラー番組で活躍中。



1 メジロ

これは、もう五十年近くも昔のできごとです。

私の通^{わた}っていた小学校では、メジロを飼^かうことがはやっていました。目の周りに白いふちどりをつけた、なんともかわいらしい小鳥を、つがいで鳥かごに入れて飼^し育^いくのです。学校が終わると、自分の飼^かっているメジロを友人の家に持ち寄^よっては、こっちのほう^{つが}が毛並^{けな}みがいいとか、こっちのほう^{つが}が体が大きいとか、子どもたちはたがいのメジロを自慢^{じまん}し合^あっていました。

裕福^{ゆうふく}な家の子どもは、町の百貨店^{}でつやつやした毛並みのメジロを買^かっていました。しかし、私の家は貧^{まず}しくて、遊びのために金を出^だしてメジロを買^かうなどということは考えられないことでした。

そこで私は、自分でメジロをとることにしたのです。メジロのとり方を教えてもらおうと、私はなんでもよく知っている祖父^{そふ}の部屋^{へや}に向かいました。

しかし、祖父は、「自然の中で生きよるものに、手を出したらあかん。」と、強い口調で私に言^いいました。

私は納得^{なっとく}しませんでした。どうしてもあきらめきれず、次の休みの日、私は、いやがる弟を連れて、朝早くに家を出^でました。弟に虫取り用のアミを持たせ、私は、家の納屋^{なや}からことわりなしに鳥^{*}もちを拝借^{はいしゃく}して、家の裏手^{うらて}にあるみかん畑^{はたけ}に向かいました。みかん畑にあるしげみには、いつもメジロが巣を作ることを、私は知^しっていたのです。

つがい
動物のおすとめすの一組みのこと。

裕福
生活に余裕(よゆう)があること。
百貨店
小売店が集まった大規模(きび)な店。デパート。

鳥もち
鳥や昆虫(こんちゅう)をつかまえるのに使うべたべたしたもちのようなもの。

メジロの巣は、背の低い木の枝に、まるで小さな帽子を逆さまにしたように丸っこく引っかかっています。それは、まだ背の小さい私でも、背のびすれば巣の中がのぞけるくらいの位置にあることも多かったです。

裏のおかを登り、みかん畑に入って、巣を探しました。夏が近づいたこの時期は、メジロの親鳥が、ヒナたちにえさをやるのにいそがしいころです。メジロがあたりを飛び回っているのを見て、私は胸を高鳴らせました。巣はすぐに見つかりました。畑のわきのしげみに、枯草でできた小さな巣が見えかくれています。

私は、巣の近くにあるみかんの木を選んで、枝の先に、半分に切った夏みかんの実をつきさしました。それをつきにやってきたメジロがとまりそうな小枝のあたりに、白色のねばねばした鳥もちをべったりとぬりつけました。

「ねえ、やっぱりやめようよ、兄ちゃん。」

夢中でワナをしかけている私のすぐ後ろで、弟が何度もそう言っていました。私は弟を相手にせず、いやがる弟の手を引いてしげみの中身をかくしました。胸をドキドキさせながらのぞいていると、やがて私の目の中に、とても小さくて、でも宝石のようにキラキラした緑色の小鳥がうつりました。メジロがやってきたのです。メジロは、きれいな羽をすごい速さで羽ばたかせていました。足をのばして、ワナのしかけられた枝にとまりました。

拝借
借りるじやう。



その瞬間、メジロがするどい声で鳴きました。

私は、しげみを飛び出しました。鳥が暴れて羽に鳥もちが付いてしまうと、メジロの美しい緑色の羽毛は、うすよごれた茶色になってしまふと聞いていたからです。枝に足を張りつけたまま、なんとか飛び立とうともがいているメジロを、私は、右手でむんずとつかみまし。そして、左手で、鳥もちにくっついてしまった二本の足を、一つずつ慎重に引きはがしました。おくれてしげみから出てきた弟が、私の背中に立って、泣きそうな顔をしてメジロを見ました。「兄ちゃん、やめてよ。やめようよ。」と言う声が、興奮した私の耳に届きました。

私は、ほおを真っ赤に染めて、つかまえたメジロを顔の前にかかげました。メジロの体はとてもあたたかく、私の手の平の中で、小さな心臓がトクトクと、信じられないほどの速さで打っていました。私の心臓も早鐘を打っていました。私は、腰にくくりつけた鳥かごにそのメジロを入れました。それを弟に見せて、「どうだ」とばかりに胸を張りました。

弟は泣きそうな顔のまま、私の顔と、鳥かごの中のメジロを、何度も交互に見ていました。家に帰り、親や祖父に見つからないよう納屋に鳥かごをかくして、私は長い間、あきることなくメジロをながめ続けました。メジロは目を閉じてじっとしていました。止まり木とまったまま、鳴きもしなければ、エサをついばむこともしませんでした。

「ねえ、兄ちゃん起きて。メジロが……。」

翌朝、弟に肩をゆすられて目を覚ましました。私は飛び起きて、一目散に納屋に向かいました。弟の小さな足音が私の背中を追いかけてきます。しゃがみこんで鳥かごをのぞくと、

むんず

強い力でつかむこと。

慎重

注意深く行うこと。

10 早鐘を打つ

心臓が激(はげ)しく動くこと。

15

一目散

わき目もふらずに走ること。

メジロは止まり木から落ちていました。目を閉じて、弱り切った体をかごの底に横たえていました。

——自然の中で生きよるものに、手を出したらあかん。

祖父の言葉が耳の中にひびきます。私はとてもあわてました。羽についてしまった鳥もちがいけなかったのでしょうか。それとも、足を無理に引きはがしたのがいけなかったのでしょうか。鳥かごから出して手の上に乗せてみると、昨日はあれほど速く感じた心臓*こどうの鼓動が、今にも消えそうなほどに弱くなっていました。

「どうしよう、兄ちゃん」

弟にそう言われて、私は手の平にメジロを乗せたまま、きよろきよろとあたりを見回しました。どうすればよいのかわからないのです。手の中のメジロのぬくもりは今にも消えそう
10

で、私は、このメジロはきつともうすぐ死ぬのだ、命が消えるのだと思いました。
私は、メジロをだいたまま、祖父の部屋にかけこみました。祖父は、私の手の中の小さな生き物をじっと見て、それからだまって私を見つめました。そして、メジロに目を移うつして、「こ
ういうもんなんや。」とポツリと言いました。

私は、家を飛び出して、昨日のおかに向かいました。弟が泣きべそをかきながら私の後を
15
ついてきます。メジロを巣もどに戻すつもりでした。もちろん、手の中のメジロはもう飛ぶこと
はできないでしょう。巣に返したところで、このまま死ぬのにちがありません。でも、私
はもう、少しでも早く、この消えかけている命から手をはなしたかったのです。

巣の中をのぞきこんで、私はさけびそうになりました。

鼓動
心臓が血液(けつえき)を送り出すために規則的(きそくてき)に動くこと。

黄色いくちばしをした小さなヒナが、四羽、巢の中に転がっていました。みんな、大きなひとみを厚いまぶたでおおって、団子みたいに小さくなって、ピクリとも動きません。

私は思い出しました。卵からかえったばかりのメジロのヒナは、数十分おきにエサをあたえないと、うえて死んでしまうのです。私が親鳥をつかまえてしまったから、もう一羽の親鳥だけではヒナにやるエサが足りず、四羽のヒナは死んでしまったのです。私はなんということをしてしまったのでしょうか。言葉が出てきませんでした。それ以上見ていられなくて、私は巢から顔をそらしました。

冷たくなりかけたメジロを巢にもどし、私は夢中でにげ出しました。うつむいたまま、みかん畑に背を向けて、全力でおかをかけ下りました。

弟の小さな足音がどこまでもついてきます。

「兄ちゃん、待って。待ってよう。」

どこからか、メジロの鳴き声が聞こえた気がしました。

ふり返ることはできませんでした。

半世紀がたった今でも、あの時の事をふと思い出すのです。



メジロ

●「メジロ」を読んで考えたこと

生命を大切にする



「はやくこないかなあ。」

今日は塾じゅくの日だ。ぼくは乗車口の二列目に並んでいた。前には、松葉まつばつえをついた若い男わかの人が並んでいる。運おが良ければ、ぼくの降りる駅まで座っていくことができる。

「まもなく、電車が到着とちやくします。白線の内側までお下がりください。」

プラットフォームにアナウンスが流れた。ドアが開くと、前の人の横をすりぬけ、席せきに向かった。

「やったあ！」

横なら並びの席せきの中央ちゆう寄りに二人分だけ空いている。残りの一席には、松葉まつばつえの男の人が座った。

「宿題をしなくちゃ。」

ぼくは、問題集を開いて必死にシャープペンを走らせた。電車も軽快けいかいに走ってゆく。電車が三つ目の停車駅にとまった。

「ふうー、あともう少しだ。」

大きく息をはいて頭を上げたとき、赤ちゃんをだいたお母さんが乗ってくるのが見えた。

松葉つえ
足が不自由な人の歩行を補助
(ほじよ) するための道具。

肩かたにかけて大きなバッグが今にもずり落ちそうだ。ぼくの方へ近づいてくる。ぼくはあわてて帽子ぼうしのつばで顔をかくした。

そのとき、となりの席の人が立ち上がる気配がした。

「どうぞ。座ってください。」

男の人の声にぼくは、ほっとした。

「いえ。あなたは足が……。」

小さな声でお母さんが言った。その瞬間しゅんかん、二、三人の周りの人が立とうとした。若い男の人は、松葉づえを右わきにはさんで、左手で周りの人を制せいしながら、

「すぐ降りますから。どうぞ。」

そう言うと、ドアの方へ歩いて行った。お母さんはその後ろ姿すがたに頭を下さげ、ぼくの横こしに腰をおろし、赤ちゃんをひざの上にだいた。ぼくは周りの人から

15

10

5



にらまれているような気がして急に問題が解けなくなった。

電車が次の駅に止まり、若い男の人は松葉づえをホームにつき、ぴよんと飛ぶようにして降りていった。赤ちゃんをだいたお母さんがその人に向かって頭を下げた。

二駅停車した後、お母さんは降りて行った。

しばらくして、アナウンスが流れた。

「次は、ぼくの降りる駅だ。」

あわてて出口に向かったぼくは、ホームに降りると思わず立ち止まった。自分の目をうたがった。となりの車両から松葉づえをついた人が降りてきたのだ。

「えっ、どうして。」

若い男の人は、コツコツと松葉づえの音を立ててゆっくりと改札口に向かっていく。ぼくは思わずその人の後ろからついて歩いた。夕日がいっぱい当たった若い男の人の背中がかがやいて見えた。



背^せ 中^{なか}

●「背中」を読んで考えたこと



3 言い忘れた言葉

金曜日の放課後のできごとです。胸にウサギのエサの入った大きなふくろをかかえて、飼育係のあやは、廊下を急ぎ足で歩いていました。

金曜日は、あやがウサギ小屋の当番の日です。やることはたくさんあります。ウサギをつかまえて外に出し、それから小屋をきれいに掃除

して、ウサギのエサを新しいものに取りかえて、また小屋にウサギをもどしてやります。何十分もかかってしまう大仕事です。その上、夕方からは学習塾に行かなければならないので、あやはとても気持ちがあせていました。

教室を通り過ぎようとしたところで、友達のみゆきが、

「あやちゃん。今日ゴミ捨て当番だったやろ？」

10

5



いそがしそうやったし、うちがしといたよ。」

と、あやに声をかけました。少しでも早く飼育小屋に向かいたかったので、あやは足を止めずに、

「あ、そうなん。」

と答えて、みゆきとすれちがいました。

5

翌日よくじつの土曜日、お昼過ぎのことです。あやはスイミングスクールから家に帰るため、電車に乗っていました。スイミングの帰りの電車はいつもねむくなります。あやは、八人がけの席の、真ん中あたりに座すわっていました。電車の中は、立っている人がほとんどおらず、ぽつぽつと空席がありました。あやの両隣りょうどなりも空いていたので、ゆったりと座ることができました。10

駅に着き、ドアの開く音がして、あやはねむたげな顔を上げました。ドアから、大学生くらいの三人の女の人たちが乗ってきました。楽しそうにおしゃべりしながら、あやの座っている席の近くにやってきました。周りをさっと見回して、三人のうち、二人があやの左隣にストンと腰こしを下ろしました。

背せが高く、赤い髪留かみどめをしているもう一人の女の人、つり革かわにつかまったまま、体を

15

前にかたむけるようにして、座っている二人の友達と楽しげに話しています。

あやは、そんな三人の様子をねぼけまなこでながめていました。

次の瞬間、あやは、あっと思って席を右に一つ分ずらしました。自分が座っていることで、三人のうちの一人が立っていることに気づいたからです。

気がきかなかった自分がはずかしくなりました。あやの左側の席は、あやが移動したのでポツカリと一つ分空きました。

——でも、その女の人は、空いた席をちらりと見ましたが、つり革かむにつかまって立ったままでした。二人の友達とおしゃべりしています。

あやの左側に座っている女の人も、ちらりと空いた席に目をやりましたが、気をきかせたつもりのおやにはひと言もありません。

あやの左隣の席ひだりとなりがぽっかりと空いたまま、電

15

10

5



車は次の駅に到着とうちやくしました。窓まどから、ホームで電車を待っているたくさんの方が見えました。

すると、電車がとまるかとまらないかのタイミングで、立っていた女の人は、あやが空けた席にストンとこしを下ろしたのでした。何も言わず、あやを見もしませんでした。

あやは、だまったまま、心の中でムツとしました。

その瞬間に昨日のことを思い出しました。

——— そうですねば、昨日……。

みゆきの顔が思いうかびました。

あやは電車にゆられながら、昨日のことを考え続けていました。

週が明けた月曜日、校門のところで出会ったみゆきに、あやは元気に声をかけました。

15

10

5



「みゆき。金曜日はゴメンな。言い忘れとった。」

みゆきはきよとんとしています。

「え？ 何が？」

「ありがとう。」

「え？ だから何が？」

「ゴミ捨^すて行^いってくれてありがとう。」

みゆきのほおがパツと赤く染^そまりました。

「はあ？ なんやそんなん。ええん

よ。」

みゆきの笑^{えが}顔^おに、あやも自然と笑^わ顔^ずになりました。

10



5

(資料作成ワーキング会議編)



言い忘れた言葉わが

●「言い忘れた言葉」を読んで考えたこと



4 道頓堀を作った人

*えびすばし *らんかん
戎橋の欄干に寄りかかりながら、耕太は、あつあつのたこ焼きを口に放りこもうとしていました。となりに親戚のおじさんがいて、さっきからたこ焼きやお好み焼きを続けざまに食べている耕太に、何だかあきれたような顔を向けています。

「耕太、さっきからなんぼなんでも食い過ぎや。ええかげんにしとき。」

そう言われて、耕太はニツと笑ってからおじさんに言いました。

「ええやん。せっかく道頓堀まで来たんやもん。『くだおれ』っていうやないか。」

おじさんは、耕太を見て、「はあ」とため息をつきました。

「ちやうわ。『くだおれ』いうんは、『杭がだめになってたおれる』っちゅう意味なんや。」

耕太は目を丸くします。知りませんでした。てっきり、「食べ過ぎて動けなくなる」という意味だと思っていました。

「杭？ 杭って何なん？」

おおぜい
大勢の人が、休日の道頓堀川の脇道を楽しそうに歩いています。おじさんが欄干にひじをついて、遠くをながめるようにして言いました。

「昔の橋はな、杭をたくさん打って作ったんや。*しんさいばし心齋橋、あるやろ？ あれも、昔の人がお

戎橋

道頓堀川にかかっている橋。

欄干

橋などの、落下防止（ぼうじ）用の手すり。

5

目を丸くする

おどろくこと。

10

心齋橋

江戸時代にあった橋。現在は、心齋橋筋（すじ）商店街と長堀通（ながほりどおり）の交差点にある横断（おうだん）歩道のことを指す。

金を出し合って杭を打って作った町橋なんやて。」

「心齋橋ならばくも知ってるで。今ぼく、学校で班はんのみんなと大阪の名所おおさか図鑑ずかん作ってんねん。」

「ほうか。そんな図鑑作っとるんか。」

「でもな、ぜんぜんうまくいってへんねん。」

耕太は残りのたこ焼きを口の中に放りこみました。名所図鑑作りがはかどらなくて、最近の耕太は少しイライラしているのです。

「ものを作るのは、たいがい大変なもんや。耕太が今見てるこの道頓堀川かてそうや。はじめからここにあるわけやないんやで。この道頓堀川は、今から四百年くらい前に、安井道頓やすいどうとんちゅう人が作ったそうや。」

「えっ？ 道頓ちゅう人が作ったん？」

耕太はおどろきました。その道頓さんという人は、いったいどうしてそんなことを思ったのだろうと、興味きょうみがわいてきました。

おじさんは、耕太に話してくれました。

15

10

5



「もともとな、このあたりは葦*あしがしげつとる広い原っぱやった。何本も川が流れとったけど、その中でも、東横堀川ひがしよこぼりがわと木津川きづがわの二本の川を水路でつなげば、城下町*じょうかまちまで商売の船が入れるようになる。そしたら町も栄えるやろ？ だから、豊臣秀吉*とよとみひでよしは、半里(約二キロメートル)にもなる葦の原に水路を掘ほれる人を採さがしとったんや。

そこで白羽*しらばの矢が立ったのが、昔、秀吉の城しろの外堀そとぼりを作ったことのある安井道頓やすいどうとんという人や。道頓さんはおおらかな人で、大変な工事になるのはわかった上で、秀吉のたのみを引き受けた。道頓さんといっしょに仕事を引き受けたいとこの道卜どうぼくさんは、費用はどうなるのか、そもそもそんな大事業が本当にできるのかと、いろいろ不安に思っとったようやけど、よっぽど道頓さんにはれこんでいたんやろうな。道頓さんが『やる』と言うならと、いっしょになつて工事を進めていこうと決めた。

けどな、道頓さんに『水路を掘ってほしい』とたのんでいた豊臣秀吉が、一五九八年に死んでしまった。道頓さんと道卜さんは水路を掘ることを決めておったけど、そのお金が出なくなつてしまつたんや。秀吉がいなくなつてしまつたら、水路を掘る計画そのものもなくなりそうになつてしまつた。さあ困こまつた。耕太こうたならどうする？」

いたずらっぽく笑いながら、おじさんが耕太を見ました。

「そんなん、それでしмайや。」

葦
しめつたところに広く生える

草。

城下町

城を中心に、その周りに発達した町のこと。

豊臣秀吉

(一五三六—一五九八年) 戦国く安土桃山(あづちもやま)時代の武将(ぶしやう)。

一五九〇年に全国を統一した。

白羽の矢が立つ

多くの人の中から選ばれること。

おじさんはニヤニヤしたまま言いました。

「道頓さんはな、秀吉のあとに豊臣家を取り仕切った片桐且元かたぎりかつもとに、『それなら、この道頓が一人で掘ればどうでございますか』と申し出たんや。」

耕太はびっくりしておじさんの顔を見上げました。

「この川を全部？」

「そうや。お金も出ないし人も足りひん。それでも道頓さんが、『掘る』と決めたのは、何でなんやろうな。」

耕太は道頓堀川をながめながら考えます。だれかにやれと言われたわけでもないのに、どうして道頓さんは「続けよう」と思ったのでしょうか。

おじさんが続けます。

「……道頓さんは、お金が出ないなら自分ではらうと言って、自分の財産ざいさんを切りくずして人をやとい、工事を進めていったんや。もちろん、安井家がいくらお金持ちや言うても、これだけの水路を掘るのんなんて不可能ふかのうや。そこで道トさんが活躍かつやくしたわけや。この水路ができれば、商船*が入れるようになって町が栄える。たくさん*の利益りえきが出ると、商人たちに協力をあおいだ。道頓さんと道トさんの二人で、なんとかこの水路を作り上げようががんばった。」

耕太は、橋から道頓堀川をながめ直しました。

15

商船
商売のための船。
利益
もつけのこと。

10

5

「この長い川を……。」

「そうや。何年もかかったけど、道頓さんと道トさんはそれをやりとげた。この水路ができたのは一六一五年や。水路ができあがる直前に、道頓さんは、*おおさか大阪夏の陣じんに出陣して死んでもうたけど、その志を道トさんがついで、この水路を完成させたんや。」

耕太には、目の前こうたにある川が、さっきと同じ川なのに、何だかちがうもののように見えませんでした。

「道頓さん、格好ええな。」

「ほうか。なんで格好ええと思う？」

「そりゃあ……。」

口を開きかけ、耕太はだまりました。

「それで、この水路についた名前が『道頓堀川』や。」

おじさんが耕太の頭に手を置いてそう言いました。耕太は道頓堀川のはるか先を見つめました。

「よし。」

耕太は声に出してそう言いました。

大阪夏の陣
一六一五年に江戸（えど）幕府（ばくふ）が豊臣（とよとみ）家をほろぼした戦いのこと。



道頓堀を作った人

道頓堀の歴史

●「道頓堀を作った人」を読んで考えたこと



努力する

5 ひつがけのん

「ちゃんと信号は守らなあかんよ！」

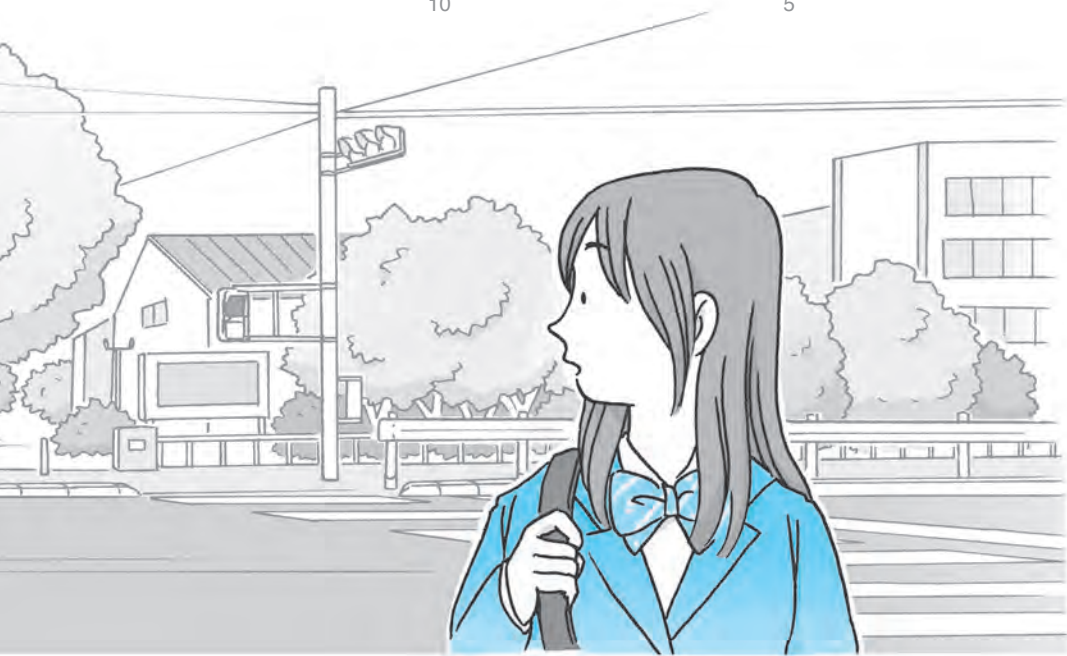
かおりは大きな声で言いました。高校へかう通学途中とちゅうの路上で、赤信号を無視むしして横断歩道おうだんをわたろうとしていた小学生の男の子を呼び止めたのです。かおりの目の前には、肩かたをすぼめてしゅんとう*なだれている野球帽やきゅうぼうの男の子がいました。

5

「ええね。これは決まりなんよ。」

かおりもこの近所に住んでいるので知っています。この辺りに住む小学生は、みんなこの道路を横断しないと学校に行くことができないのです。車などめったに通らないのですが、横断歩道にはきちんとして信号機がついていて、歩行者用の赤信号の時間が長いものですから、子

10



うなだれる
力なく首を前に垂（た）れる
こと。うなだれた。

どもも大人も信号を無視してわたってしまうの
です。かおりも、この場所で何度も信号無視を
目にしていました。

「……だって、みんなわたってるし。」

男の子は、体をもじもじさせながらかおりに
言います。

「みんながしてるからって、あかんものはあか
んねんで。車がこうへんからって、わたってえ
えもんやないやろ。」

「……だって、六年生もわたってたのに。」

そう言われて、かおりはだまっています。まじ
た。確かに、五年生や六年生のような高学年の
児童や、ときには大人たちの中にまで、「どう
せ車なんてこない」と考えて、この信号を無視
する人がいるのです。

かおりは、腰を曲げ、しっかりと男の子の目

15

10

5



を見て言いました。

「お姉ちゃんはそのなことさえへんよ。ルールはきちんと守る。」

男の子がつぶやきます。

「……ほんま？」

「ほんまや。お姉ちゃん、絶対守るもんは守る。」

かおりの言葉はほとんど本場で、ほんの少しだけうそでした。

かおりは、毎日、高校で部活が終わった後に、自転車じゆくで塾じゆくに通っています。夜の自転車は危ないから、当然ライトもつけていますし、左側通行も

10

忘れわすれません。ヘルメットもかぶって、一時停止だってしっかり守っています。けれど、たった一つだけ――。

家に向かう途中とちゆうには大きな交差点おうたんがありません。そこには四つの信号機と横断歩道おうたんがあ

15



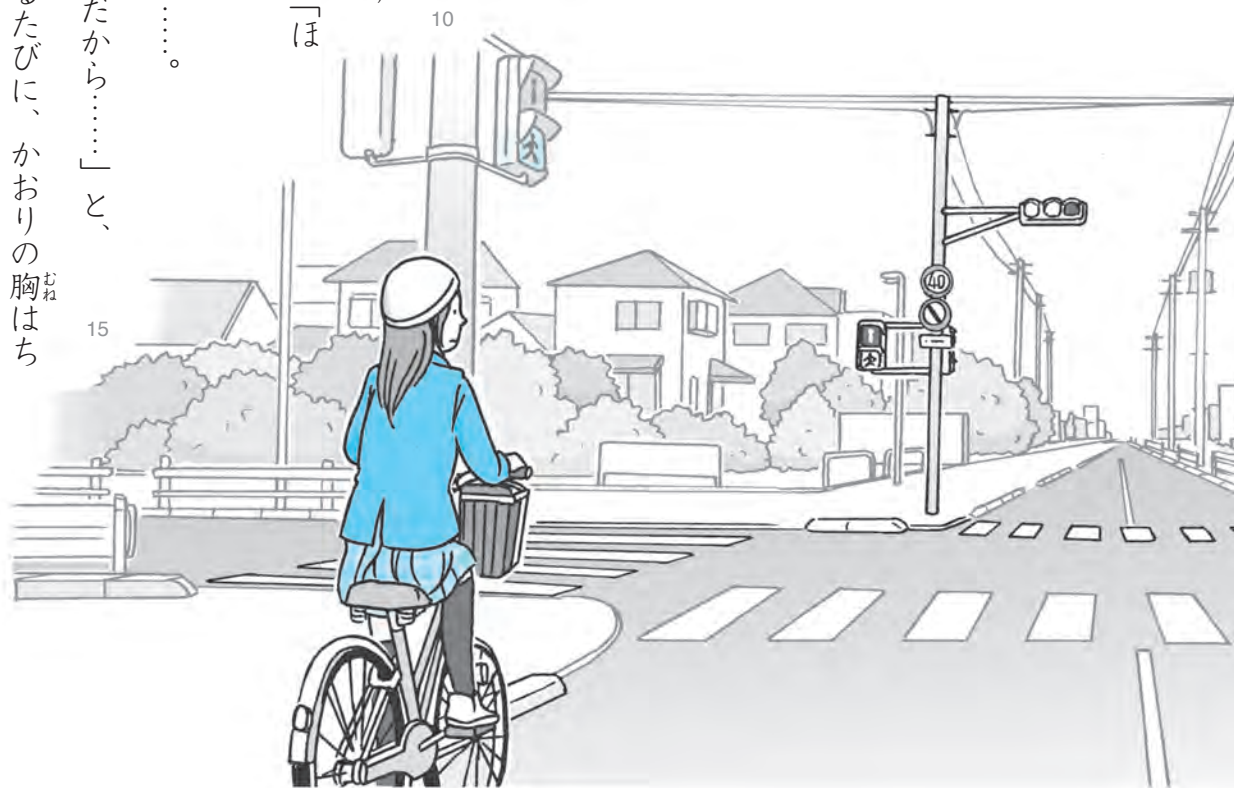
5

るので、自転車の交通ルールに従^{したが}えば、道路の左側を走って、まず一つ目の横断歩道を渡って向こう側に進み、また信号が変わるのを待って、今度は右に横断歩道をわたらなければなりません。信号はなかなか変わらず、待っている時間ばかりが長くて、かおりはいつもイライラしていました。目の前の信号を右に曲がって、道路の右側をほんの少し走ってしまえば、あつという間に家に着くことができます。

最初のころは、がまんして信号待ちをしていました。けれど、何度も何度もその道を通っているうちに、だんだん、「ほんの少しだけ……」と思うようになっていったのです。

——ほかの決まりはみんな守ってるんやし、このくらい……。

そして一度、右側を走ってしまっただけから、「ここだけだから……」と、ルールに反して逆走^{ぎゃくそう}を続けているのでした。この道を通るたびに、かおりの胸^{むね}はち



くりと痛むのです。

今日も、かおりは塾の帰りに、家に向かって自転車をこいでいました。

例の交差点にさしかかりました。いつものように、自動車の姿は見えません。

——ほんの少し。ほんの一瞬だけやし……。

またそう思いながら横断歩道をわたり、道路の右側を進みだしたときでした。

「あっ。」

かおりは息をのみました。ついこの間、かおりが信号無視を注意した野球帽の男の子が、お母さんと手をつないで、反対側の路肩*ちうかたに立って、自分を見ていたような気がしたのです。

——ちがう。これはちがうよ。

立っていた子どもが、あのときの野球帽の子かどうかはわかりませんでした。けれど、か

おりの心臓しんぞうはドキドキしたままでした。

5

路肩

10 道路の両端（りょうたん）の
部分。



ひとかけらのうそ

●「ひとかけらのうそ」を読んで考えたこと

ルールやマナーを守る



6 ニリンソウ

良太は、野山にさく草花が好きなお父さんからさそわれて、五月のよく晴れた日曜日に、

金剛山*こんごうざんにニリンソウを見に行くことになりました。

千早本道ちはやほんどう入口でバスを降りて、良太とお父さんは二人並んで登山道に入りました。大勢おおぜいの人がいます。小学校三年生の良太は、登山は初めてですが、お父さんといっしょに歩くのがうれしくて、必死でお父さんのあとについて行きました。大勢の人の足にふまれて、足元の山道は階段かいだんのように固まっています。歩きにくくはないのですが、登山道はとても細く、下山する人とすれちがうときには、ゆずり合わなくてはなりません。

「こんにちはあ。いい天気やねえ。」下山してきたおばさんが、良太とお父さんにあいさつしました。お父さんはニコニコしながらそれにこたえます。

「こんにちは。山頂さんちようはどうでした？」

「ここよりいくらか寒いかねえ。」

また別の人とすれちがいます。お父さんはまた笑顔えがおであいさつを返して
います。良太は不思議でした。

「お父さん、みんな知ってる人なん？」

10

5

金剛山

標高一二五メートルの山

金剛山地の主峰（じゅほう）。

ニリンソウ

春の山にさく白く小さい花。



お父さんが笑いながら言いました。

「何言うとするんや。みんな初めて会う人たちがな。」

「へえ。それじゃなんであいさつするん？」

「山では、知らん人もあいさつするのがマナーなんや。何も言わんですれちがうより、おたがいにならずと気持ちええやろ。」

確かに、すれちがう人はみんな、「こんにちは。」とか、「あともう少しで山頂や。がんばり。」などと声をかけあっています。

長い階段を登り終えると、「金剛山頂まで約一四〇〇メートル」と書かれた案内板が見えてきました。登山道の中ほどまでやってきたのです。

前からやってきた、下山中のおじさんとおばさんが、良太に声をかけました。

「こんにちはあ。今日はお父さんと山登り？」

良太は声が出ずにドギマギします。お父さんが、良太の背せなか中をトやンと優やさしくたたきました。

「あの……、こんにちは。ぼくたち……。あの……、ニリンソウを見に……。」

良太がもじもじと口くちごもっているとおばさんが、「あらそう。さっき私わたしらも見えてきたんよ。きれいやったあ。」と、笑顔で言ってくれました。

おばさんにそう言われたら、急にすんなりと声が出るようになりました。良太はたずねます。

15

口くちごもる
言葉ことばが出てこない様子。

10

5

「ニリンソウ、たくさんさいとった？」

「さいとったよ。ちょうど見ごろやねえ。」

良太はともうれしくなりました。

頂上ちようじやうに着くまでの間、たくさんちんの下山中の人たちとすれちがいました。良太はそのたびに、

「こんにちは。」と明るく声をかけました。すると、みんな決まって笑顔えがおになって、「こんに

ちは。」と答えてくれるのです。お父さんが、ニコニコしながら良太を見ています。

もう少しで、ニリンソウのさくカトラ谷が見えてきます。

金剛山こんごうざんに行った翌朝よくあさ、家を出ると、となりの家のおばさんがいつものように道みちを掃除そうじして

いました。ふだんはおばさんから「おはよう。」とあいさつされるのですが、その日、良太は自分から「おはようございます。」と言ってみました。

おばさんが一瞬いっしゆんおどろいたようすの後、ニッコリとほほえんでくれました。

「良太くん、おはよう。」

いつもと変わらない朝なのに、良太には空が青く感じられたのでした。



二リンソウ

●「二リンソウ」を読んで考えたこと

「あいさつ」をもっと大切にしよう



生命を大切に

生きることがもちろん
人生の最高目標である。

グリルパルツアー

(オーストリアの劇作家)

感謝する

「ありがとう」という言葉は、
ポケットにしまっては
いけません。

ユダヤの格言

思いやる

心をおだやかにさせるには
思いやりをもつことが大事である。
一切の私心をはさまずに物事にあたり、
人に接するならば、心はおだやかに
余裕をもつことができるのだ。

渋沢栄一 (実業家)



努力する

失敗すればするほど、
我々は成功に近づいている。

エジソン（アメリカの発明家）

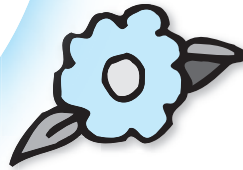
ルールやマナーを守る

法律の規定に触れさせなければ
何をやっても可いという思想ほど、
社会に迷惑をかけるものはない。

吉野作造（政治学者）

あいさつをする

礼儀作法というのは、
各自が自分を映す鏡である。
ゲーテ（ドイツの詩人、劇作家）



「^{さいせい}こころの再生」府民運動

小学校5・6年

「大切なこころ」を見つめ直して

指導助言者 横山 利弘 元関西学院大学教授
元文部省教科調査官

「こころの再生」府民運動の趣旨を盛り込んだ道徳教育資料作成
ワーキング会議（略称：資料作成ワーキング会議）メンバー

山野 佳世子 大阪府教育委員会首席指導主事
向井 正明 大阪府教育委員会指導主事
田中 真樹 大阪府教育委員会指導主事
藤田 卓也 大阪府教育センター指導主事

発行：大阪府教育委員会

〒540-8570 大阪市中央区大手前2丁目

平成26年3月

イラスト●アフロ／イメージナビ／イラストAC／川野郁代／

日下部謙太／amanaimages／orion

写真●イメージナビ／フォトライブラリー
